

原子爆弾雑話

中谷宇吉郎

青空文庫

昭和十二年の七月、北支の蘆溝橋に起つた一事件は、その後政府の不拡大方針にもかかわらず、目に見えない大きい歴史の力にひきずられて、漸次中支に波及して行つた。そして、十月に上海が陥ち、日本軍が首都南京に迫るに到つて、漸く世界動乱の萌しが見えて来た。

丁度その頃、私は「弓と鉄砲」という短文を書いたことがある。切抜帖を開いてみると、それは十二年十一月の『東京朝日』に書いたものである。

弓と鉄砲との戦争では鉄砲が勝つであろう。ところで現代の火器を丁度鉄砲に対する弓くらいの価値に貶してしまふような次の時代の兵器が想像出来るであろうか。

火薬は化合しやすい数種の薬品の混合で、その勢力は分子の結合の際出て来るものである。その進歩が行き詰つて爆薬の出現となつたものであるが、爆薬の方は不安定な化合物の爆発的分解によるもので、勢力の源を分子内に求めている。勿論爆薬の方が火薬よりもずっと猛威を逞うする。この順序で行けば、次にこれらと比較にならぬくらいの恐ろしい勢力の源は、原子内に求めることになるであろう。

原子の蔵する勢力は殆んど全部原子核の中にあつて、最近の物理学は原子核崩壊の研究にその主流が向いている。原子核内の勢力が兵器に利用される日が来ない方が人類のためには望ましいのであるが、もし或る一国でそれが実現されたら、それこそ弓と鉄砲どころの騒ぎではなくなるであろう。

そういう意味で、現代物理学の最尖端せんたんを行く原子論方面の研究は、国防に関聯かんれんある研究所でも一応の関心を持つていて良いであろう。しかしこの研究には捨て金が大分要ることは知つて置く必要がある。劍橋ケンブリッジのキャベンディッシュ研究所だけでも、六十人ばかりの一流の物理学者が、過去十年間の精神力と経済力とを捨て石として注ぎ込んで、漸く曙光しやうこうを得たのであるということくらいは覚悟しておく必要がある。

この短文を書いた頃は、今回の原子爆弾の原理であるウラニウムの核分裂などは勿論知られていなかったし、キャベンディッシュの連中を主流とした永年にわたる研究も、漸く原子核の人工崩壊の可能性を実験的に確めたという程度であつた。しかし現代の方向に発展して来た科学の歴史をふり返してみると、順序としては次の時代の勢力の源は原子の内部、即ち原子核の中に求めることになると思像するのが一番自然な考え方のように私には思わ

れた。

分子と分子との結合による火薬、分子の破壊による爆薬、分子の構成要素である原子の崩壊による「原子爆弾」と並べてみて、その順序をつけるのは、勿論人間の頭の中でのことである。ところが本当にその順序の通りが実現するところに、自然科学の恐ろしさがあるのである。

この短文を書いた頃の二、三年前、私は二、三の国防関係の要路の人に会った時に、こういう意味のことを話したことがある。勿論我^{わがくに}国でもこの時代に既に理^{りけん}研^{けん}の仁科博士の下や、阪^{はん}大^だの菊池^{きくち}教授の所で、原子物理学関係の実験が開始されていたので、そういう方面からも進言があつたことであらう。しかし何十年か先のことで、しかも果^{はた}して兵器として実用化されるかどうかまでも見当のつかない話を、本気で取り上げてくれる人はなかった。やれば出来るに決っていることをやるのを研究と称することになっていた我国の習慣では、それも致し方ないことであつた。

ところが、当時海軍の某研究所長であつた或る将官が、真^ま面目^{めいめ}にこの問題に興味を持たれて、一つ自分の研究所でそれに着手してみたいがという相談があつた。理研や阪大の方に立派なその方面の専門家が沢山おられるのに、何も私などが出る必要はないのであるが、

話をした責任上とにかく相談にはあずかることになった。

今から考えてみれば、あの時それだけの研究費を、既に原子物理学方面の実験を開始している専門家たちの方へ廻してもらった方が、進歩が速かったことであろう。しかし何万円という研究費を毎年出すとなると、やはりその研究所の中で仕事をしなければならぬというのが、当時の実情であった。何万円というのは、その研究所としてもかなり多額と考えられていた時代のことである。

当時私の教室では、原子物理学の研究によく使われる或る装置を使って、電気火花の研究をしていた。それで実験技術としては満更縁のない話でもないので、私の所の講師のT君が私の方を辞めて、その研究所へは行って、専心その方面の仕事を始めることになった。

もつともこれは随分無理な話で、英米の世界一流の学者が集まって、金に飽かし鎬を削って研究している方面へT君が一人ではいつて行って、その向うが張れるはずはない。それでこういう条件をつけることにした。それは、もともと無理な話であるから、初めから英米の学者と太刀打をさせるつもりでなく、先方の研究の発表を待って、その中の本筋の実験を拾って、こちらでそっくりその真似をさせてもらいたいというのである。随分卑屈

な話のようであるが、それが巧く行つて、英米の研究にいつでも一步遅れた状態で追隨して行けたら大成功である。そうなつていれば、先方で原子核勢力の利用が実用化した時には、こちらでも比較的楽にその実用化にとりかかれるはずである。原子兵器の出現に遭つてから、慌ててその方面に関係した器械を注文するといふのでは仕様がなない。しかしそれに類したことが、実際にしばしば起つていたのである。器械に馴れているといふことの強味は、実際に実験をしたことのある人でないとちよつと分らないくらい有力なことである。もつとも新しい下駄でさえ履きづらいものであるから、新しい物理器械がそう簡単に働いてくれるはずはない。

その将官の人は大變理解のある人であつて、この話にすぐ賛成してくれた。そしてT君が入所したらすぐ一通りの器械の註文をすまさせて、欧米の關係研究室を見学させるという話になつた。とりあえず設備費として十万円くらいは出してもいいということである。今度のアメリカの原子爆弾の研究費二十億ドルと較べては恥ずかしい話であるが、当時の我が国としてはそれでも破天荒なことであつた。

此処までは話は大變面白いのであるが、いよいよT君がその研究所の人となつて、一通りの器械をととのえるべくその調査にかかったら、間もなくその所長が転出されることに

なつた。一方国際的には、支那事變が漸く本格的な貌かおを現あらわして来て、今更研究どころではないという風潮がそろそろ国内に漲みなぎり出した時期である。それで真ま先に取止とりやめになつたのは、この原子関係の研究であつた。折角勢い込んでいたT君は「もう戦時態勢にはいつたのだから、そういう研究は止やめて、砲ほう金の熱伝導度の測定を始めてくれ」ということで、急に金属物理学の助手に早変りすることになつた。これで「私の原子爆弾」の話はおしまいである。誠に飽氣あつけない話である。

ところで人類科学史上未曾有みぞうの大事事件たる原子爆弾の研究に、こういう企てを試みることにすら、いささかドン・キホーテ的であつたことが、今度のアメリカの発表でよく分つた。T君はいわばいい時にドン・キホーテの役割を免ぜられたものである。と言うのは、もしあの時の将官がそのまま続いて在任され、どんどん研究費を出し、学者の数も増やし、大いに頑張つてみても、我が国ではとても原子爆弾が出来る見込みこみはなかつたと私には思われるからである。それは日本には原料たるウラニウムがないとか、ラジウム源の貯蔵が少いとかいう問題ではない。それは国民一般特に要路の人たちの科学の水準と、今一つは国力の問題とである。

私たちが「弓と鉄砲」の話をかつき廻つていた翌年には、独どく塊くわう合邦という爆弾的宣言

が、歐洲を一挙に驚愕きょうがくの淵ふちに陥おとしれた。そして次の年には独ソ不可侵条約が締結され、秋にはもうポーランド問題をめぐつて、英国が独逸ドイツに対して宣戦を布告したのである。翌十五年は歐洲平野における大機動戦、パリの開城、倫敦の大爆撃に暮れ、十六年には今次の戦争は遂に独ソの開戦、米国の参戦というクライマックスに達している。この間勿論我が国でも、支那事変が遂に世界戦争の面貌めんぼうを現あらわして来て「研究どころの騒ぎではなく」なつていたのであるが、英米側にとつてみれば、それこそ日本の立場どころではなかつたのである。

その間にあつて英米両国の原子方面の科学者たちは、まるで戦争など何処どこにもないかのように、宇宙線の強さを測つたり、原子の崩壊に伴う放射線の勢力の測定をしたりしていたのである。この方面の実験には膨大ぼうだいな設備と莫大ばくだいな費用とを要するのであるが、米国では殆どこの方面の研究を一手に引き受けた形で、どんどん施設をして行つたのである。そして米国の参戦と同時に先ず行つたのは科学研究の協定であつて、目ぼしい英国の学者たちはアメリカに渡つて、それに協力することになった。独逸から追われたユダヤ人の科学者たち、それは独逸の科学を建設した人たちであるが、それらの人々も殆ど全部アメリカに渡つて、甚大じんだいな貢献をしたのである。そういう大事な学者を追放したヒトラーは、

自分で自分の腕を切り落したようなものである。昭和十五年、ヒットラーが歐洲を平定して巴里に入り、ドーバー海峡越しに英本土を指呼しこの間に睨にらんでいたあの最得意の時期において、既に伯林ベルリンの悲運の萌きざしが見えていたのである。この間の消息は、昭和十五年の十月、『東京朝日』に書いた「独逸の科学誌」を転載させて頂くのが早道である。

同僚の物理学者で、新しい論文をよく読んでいる男が、この一、二年来独逸の雑誌に出る論文が著しく質が低下したように思うという話をした。私もうすうすそういう気がしていたので、直ぐ賛成して、この調子で行くと、結局米国が物理学界で覇はをとえるようになるかもしれないなどと話し合ったことがある。

独逸科学の心酔者に言わせれば、外に発表するのはつまらぬことだけで、本当に大切な研究は隠しているから、一見独逸の学問の水準が下ったように見えるのだというかもしれない。しかし、それだと論文を読んで見れば、何となくそういう気配が感ぜられるはずである。

そうすると、独逸が今度の戦争で使っている科学兵器の優秀さには異論がないから、基礎科学などは、どうしてもよいもののように見えることになる。しかし私たちは、現在の独

逸は、ナチに追放された偉い学者たちがまだ独逸にいた頃の学問的遺産を、いま力一杯に使い切っているのではないかと思っている。

事実独逸が遺産を喰い潰している間に、米国ではどんどん貯蓄して行っていたのである。あらゆる種類の元素について、その原子を人工的に崩壊してみても、その時に出る勢力と放射線の性質とを調べるといふ風な同じような論文が、いつまでも根気よく米国最大の科学誌『物理評論』フィジカルレビューに毎月いくつと出ている。見る方で根気負けがするくらい沢山の論文が出て、何時になつたらそれが次の時代の勢力源として実用化されるか、まるで見当がつかない状態で過ぎて行つた。

ところが昭和十五年になつて、遂にウラニウムの核分裂という新しい現象が恐るべき勢力源として現われて来たのである。その論文が日本に届いたのは、確か太平洋戦争勃発ぼつぱつの一年くらい前であつた。ラサフォードがキャベンディッシュ研究所の俊秀を総動員して、世界の物理学の主流を原子構造論から一歩進め原子の内部に足を踏み込ませ、原子核構造論の樹立に眼を開かせてから約十年、それを受けたアメリカが、莫大な物と金と人とを困難な実験に注ぎ続けて約十年、やっとこのウラニウムの核分裂の発見によつて、原子内に

秘められた恐るべき力が、科学者の前に初めてその姿の片鱗へんりんを現あらわしたのである。

しかしこの現象の発見によって原子爆弾が半ば出来たのではない。原子の性質として知られたこの核分裂現象の発見は、いわば富士山を作っている土の粒子の性質が知られたようなものである。その土の粒子を一粒一粒集めて富士山を作る仕事が、本当に原子爆弾を作る仕事なのである。

ウラニウムの核分裂の発見から原子爆弾に到達するまでに、平時だったら三十年とか五十年とかの年月を要するだろうと考えるのが普通である。実際のところ私なども、原子爆弾が今度の戦争に間に合おうとは思っていなかった。太平洋戦争勃発直前ルーズベルトがこのウラニウムの核分裂の研究に着目し、これを新兵器として使うべく、チャーチルと協力して、両国の物理学者を総動員したという噂うわさをきいても、聊いささか多寡たかをくくっていた。いくらアメリカが金を使い人を集めたところで、二年や三年で出来るべき性質の仕事ではないと考えられたからである。

ところが実際にそれが使用され、やがてその全貌あきらが明かにされて来て、初めて今度の戦争の規模が本当によく理解されたのである。アメリカのことであるから、何百人の科学者を動員し、何千万円という研究費を使っているのかもしれないが、それにしても今度の戦

争にすぐ間に合うというような生^{なま}易^{やさ}しい仕事ではないはずである。こういう風に考えていたのは私たちばかりではないらしい。ところがそれがまるで桁^{けた}ちがいの数字であったのである。「発見までには二十億ドルを費^{ついや}」し「六万五千を超える」技術作業員を擁^{よう}した大工場の作業が、極秘裡^りに進められていようとは夢にも考えていなかったのである。

この金額や人員の数は、航空機の生産の場合などには、我が国でも何も珍しいことではない。しかし驚異的の超速度で進められたというものの、この原子爆弾の完成には四力年近い年月を要している。そして今年の七月十四日に「全計画の成否を決定すべき一弾」がニューメキシコ州僻^{へき}陬^{すう}の荒蕪^{こうぶち}地に建てられた鉄塔の上に吊^{つる}されるまでは、それが本当に全世界を震^{しん}駭^{がい}させる爆弾として完成されたか否かは分らなかったのである。科学者たちは多分出来るであろうと言うが、果^{はた}して必ず出来るか否かは分らない仕事に、これだけの費用と人とをかけるということは、われわれには夢想だに出来なかったのである。

少し笑話になるが、我が国でも今度の大戦中、或る方面で原子核崩壊の研究委員会が出来ていた。その委員である一人の優秀な物理学者が、関係官庁の要路の人のところまでわざわざ出かけて来て、その研究に必要な資材の入手^{かた}方の斡^{あつせん}旋^{せん}を乞^こわれた。その時の要求が真^{しん}鍬^{ちゆう}棒一本であったという話である。冗談と思われる人もあるかもしれないが、

私は自分の体験から考えて、多分それは本当の話であろうと思っている。

いくら日本が資材に乏しいといっても、こういう重要な問題の研究に、真鍮棒一本渡せないはずはない。ないものは真鍮棒ではなくて、一般の科学に対する理解なのである。そしてそれほどまでに科学者以外の人々が科学に無理解であるということは、煎じつめたところ国力の不足に起因するのであろう。

新しい日本の建設は、先ず何よりも国力の充実に始まらねばならない。そして本当に充実した国力からのみ新しい次の時代の日本の科学が産まれるのである。もつともこういう風に言うと、そのようにして産まれた次の時代の日本の科学というものが、今日のものよりも更に強力な新しい原子爆弾の発明を目指しているように誤解されるかもしれない。しかし私は負け惜しみでなく、原子爆弾が我が国で発明されなかったことを、我が民族の将来のためには有難いことではなからうかと思っている。「原子核内の勢力が兵器に利用される日が来ない方が人類のためには望ましい」という考^{かんがえ}は、八年前も今も変わらない。今回の原子爆弾の残虐性を知ってからは、科学もとうとう来るべき所まで来たという気持ちになった。

遠い宇宙の果^{はて}の新星の中では起っていることかもしれないが、われわれの地球上ではそ

の創成以来堅く物質の窮極の中に秘められていた恐るべき力を、とうとう人間が解放したのである。開けてはならない函の蓋ふたを開けてしまったのである。これは人類滅亡の第一歩を踏み出したことになる虞おそれが十分にある。今回の原子爆弾は原子火薬を使うものとしては火繩銃ひなわじゆう程度と考えるのが至当であろう。この火繩銃が大砲にまで進歩した日のことをありありと想像し得る人は少いであろう。

新しい発明の困難さはそれが果して本当に出来るか否かが分らない点にある。一度何処かでその可能性が立証されてしまえば、もう半分は出来たようなものである。米英両国以外でも間もなく色々な型の原子爆弾が出来る日はもう遠くはあるまい。そしてそれが長距離ロケット砲と組合わされて、地球上を縦横にとび廻る日の人類最後の姿を想像することは止めよう。

「科学は人類に幸福をもたらすものではない」という西欧の哲人の言葉は、益々はつきりと浮び上つて来そうな気配がある。しかし科学というものは本来は、そういうものではないはずである。自然がその奥深く秘めた神秘への人間の憧しょうけい憬の心が科学の心である。現代の科学は余りにもその最も悪い一面のみが抽ちゆうしゅつ出されている。われわれの次の時代の科学はもつとその本来の姿のものであつて欲しい。そういう願いを持つ人は、我国ばかり

りではなく、米国にも英国にも沢山いることであろう。

（昭和二十年十月一日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「春艸雜記」生活社

1947（昭和22）年

初出：「文藝春秋」

1945（昭和20）年10月1日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

原子爆弾雑話

中谷宇吉郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>